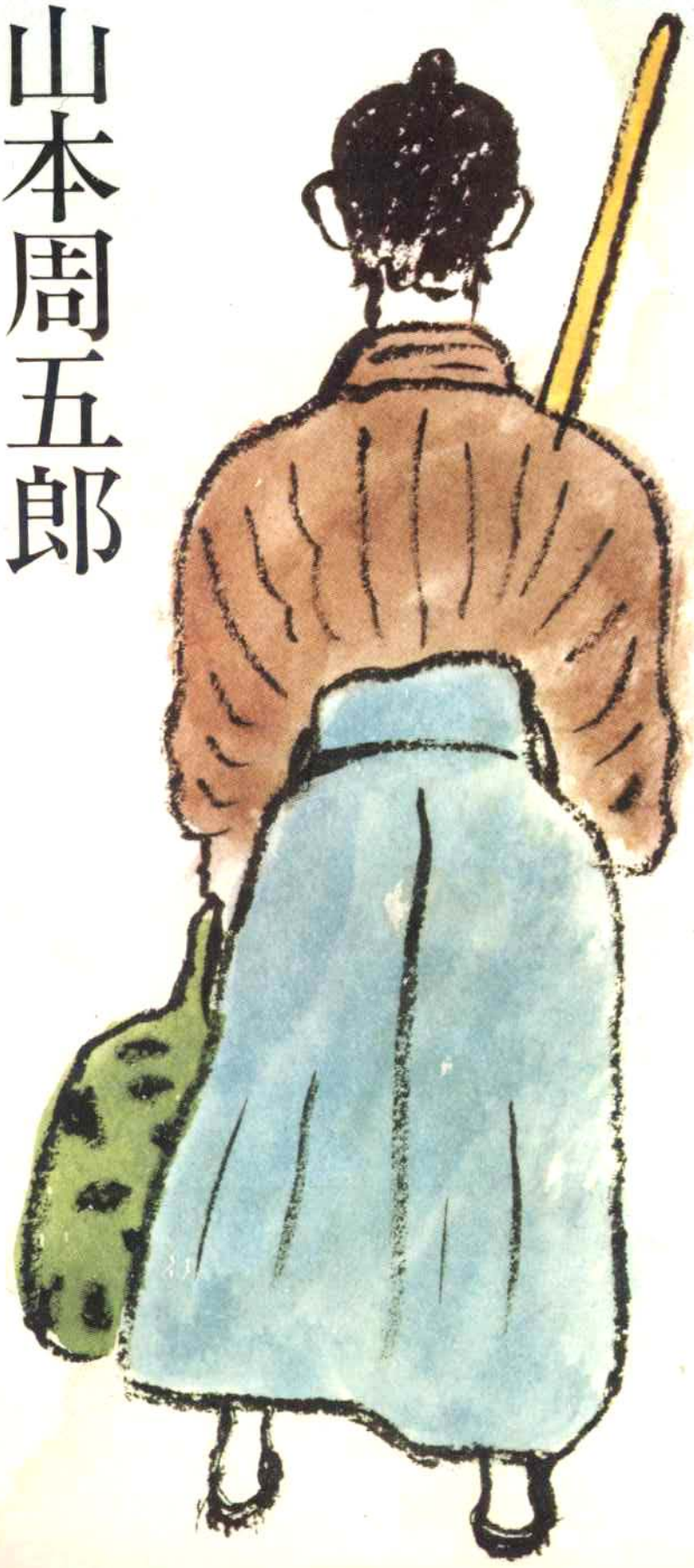
花も刀も

山本周五郎



花も刀も

新潮文庫　草134＝38

著者　山本周五郎

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六—五一一一
編集部(〇三)二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

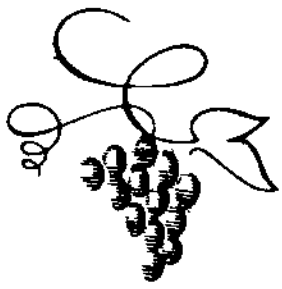
㊫ 印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Kin Shimizu 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-113439-1 C0193

新潮文庫

花も丁も

山本周五郎著



新潮社版

目次

落武者日記……七
若殿女難記……三五
古い樫木……七五
花も刀も……九九
枕を三度たたいた……二七七
源蔵ケ原……三二五
溜息の部屋……三四九
正体……三六三

解説　木村久邇典

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

花も刀も

落武者日記

一の一

「もういけない、祐八郎、下ろしてくれ」
「なにを云う」
大畑祐八郎は、叱りつけるように叫んだ。
「ここまで来て、そんな弱音を吐いてどうするんだ、元気をだせ、佐和山まではどんなことがあっても行くと云ったではないか、いいか、石に噛りついても頑張るんだぞ」
「いやだめだ、頼むから……下ろしてくれ」
ほとんど担ぐように、肩へ掛けている田ノ口義兵衛の腕が急にぐにゃっと力をなくした。そして祐八郎が肩をつきあげるようにすると、義兵衛の体は、そのままずるずるぬけ落ちそうになった。
「おい田ノ口、おい！」
祐八郎は驚いて、左手にある竹藪の中へ入って行って、友の体を肩から下ろした。……もう身を支えることもできないとみえて、濡れ雑巾のように倒れ伏すのを、祐八郎は援け起こしながら、なんども名を呼びたてた。
「しっかりしろ、おい、田ノ口！」
「……無念だ、おれは」

義兵衛は昏みゆく意識のなかから、ふいにしゃがれた声で大きく叫んだ。
「おれは、忘れないぞ、金吾中納言、犬め、松尾山の裏切り、……無念だ、無念だ」
「義兵衛、声が高いぞ、声が」
肩を摑んで揺すりながら、祐八郎は、ふと藪の向うでなにか物音がするのを聞きとめた。……関ケ原の敗戦からすでに三日、追及の手のきびしい関東軍の網の目のように張られた手配りのなかを、夜も日もなく逃げ廻って来た神経は、野獣の本能よりも鋭く、危険を嗅ぎつけることに馴れていた。
――誰かが、そこにいる。
かさッとも動かぬ藪のかなたに、じっとこっちを窺っている者の姿が、祐八郎にはありありと感じられた。……それで強く義兵衛の肩を摑んで引き起こそうとした。
「田ノ口、もうひと頑張りだ、立ってくれ」
「……」
返事はなかった。
「おい田ノ口、義兵衛！」
耳へ口を寄せて呼んだ。それから相手の口許へ耳を押し当てた。……呼吸が絶えていた。祐八郎は慌てて腹帯を解き、鎧の胴をはずしてやろうとした。
すると、そのとたんに、藪を押し分けて来る人の気配がした。
――みつかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

物音はすばやく近寄って来る。
「義兵衛、冥福を祈るぞ、……さらばだ」
祐八郎はそう囁いて、静かに義兵衛の、もう生命の失せた亡骸を横たえると、近寄って来る物音とは反対のほうへ懸命に逃げだした。
「気付かれた、そっちへ逃げるぞ」
うしろで叫びたてる声がした。
「外から廻れ！」
「鉄砲、鉄砲だ」
噛みつくような喚きが、うしろからと、左手から押し包むように響いてきた。そして、ぴしぴしと竹の折れる音に続いて、ふいに右手で銃声が起こった。
だあん！　だあん！　だあん！
祐八郎は思わず足を止めた。そして、押し包んでくる物音の方角を計ると、とっさに身をひるがえして、藪の疎らになっている一点へと走りだした。
だあん！　だあん！
めくら撃ちに射たてる銃声とともに、竹林を走る弾丸の、からからという乾いた音が、祐八郎の左右を襲った。
――くそっ。
彼は夢中で駈けた。

藪が尽きて、畑地が現われた。それから雑木林の丘を越えると、ふたたび藪につきあたった。祐八郎は自分の体を叩きこむように、その藪の中へとびこんで行った。

どのあたりで敵をひきはなしたか分らないが、とにかく追跡の手を逃れたことはたしかだった。かなり遠く、それもずっと右のほうで銃声が聞えたきりで、あたりはひっそりと物音もない。

――もう大丈夫だ。

そう思うと同時に、疾走して来た疲れと、胸膜をつきやぶりそうな息苦しさに堪えかね、彼はそこへあおむけさまにうち倒れた。そしてしばらくのあいだはただ、恐ろしい息苦しさと闘うだけが精いっぱいだった。

かなり長い刻が経った。

呼吸が少しずつ鎮まってくるにつれて痺れるような全身の疲れが、うち勝ちがたい力で彼をとろとろと眠らせた。……しかし、瞼が落ちるより早く、鮮やかな幻想が彼の脳裡に甦ってきた。

それは今から三日まえ、すなわち、慶長五年九月十五日、関ケ原に展開された合戦の、ある忘るべからざる一瞬の記憶であった。

一の二

眼もあけられぬほどもうもうと、渦巻きあがる土けぶりだった。夜明け前からはじまった合戦は、午の刻にいたって、今その最高潮に達していた。

押し寄せ、揉み返す人馬の叫喚が、撃ちあう太刀、槍、あらゆる武具の響音とともに、すさま

じく山野を震撼していた。敵味方の旗さしものが、まるで芒の穂波のように、土けぶりで茶色に暈かされた戦場を、縦横にいりみだれ、押し返し、波をうちつつ、しだいに東へ東へと移動していた。

――味方の勝ち目だ。

――見ろ、徳川家康の本陣が崩れだしたぞ。

――最後のひと押しだ。

みんなそう信じた。事実、混沌としていた乱軍のかたちが、今やもっとも微妙な勝敗の分水嶺に登りつめ、石田軍はまさに勝利の一瞬をわがものにしたと見えた。

じつにそのときであった。

味方の右翼から、眼に見えぬ一種の波動が、電撃のように全軍の上に脈搏ってきたと思うと、もっとも怖れていた叫びが人々の上で炸裂したのである。

――小早川どのが裏切った。

――金吾中納言どのが裏切った。

松尾山に陣を張っていた小早川秀秋の軍勢が、そのとき、騎馬隊を先頭に、味方の大谷刑部吉継の陣の側面へ、なだれをうって殺到して来たのだ。

憎むべし！　金吾秀秋が裏切った、まさに勝利を摑もうとした時に、その時に。小早川秀秋が敵へ裏切ったのだ！

「ああ、……」

自分の口から出た呪詛の呻きで、祐八郎ははっと仮睡から覚めた。

――秀秋の犬め、死んでも忘れんぞ！

臨終に叫んだ義兵衛の声が、なまなましく耳の奥から甦ってきた。……いや！　義兵衛ひとりの声ではない。石田三成の全軍の将士、生霊と亡魂とが声を合せて叫ぶ呪詛の叫びだ。

あたりは死んだように静かだった。

仰むけに倒れている祐八郎の眼は、枝をさし交わしている竹藪の上に、高く高く、星がまたたいているのを見た。

「ああ星が美しいな」

祐八郎はそっと呟いた。

「御主君はいま、どこでこの星を見ておいでなさるだろうか」

故太閤の恩に酬ゆるため、義軍を起こして一敗地にまみれ、味方はちりぢりばらばら、主将三成も身をもって戦場を落ちて行った。

――主君に会いたい、主君の先途を見届けたい、そして佐和山城に入ってもうひと合戦。

そう思って、祐八郎と義兵衛は落ちのびて来たのだ。

「そうだ、こうしてはいられない」

彼は身を起こした。

主君を捜さなければならぬ。佐和山城へ急がなければならぬ……。体は綿屑のように疲れていた。骨の節々が砕けそうに痛む、饑餓と渇きで、眼が昏むようだった。

彼は藪を分けて歩きだした。西へ、ただ西へ向って、歩いた。

うしろから出た月が、いつかしら前へ廻った。下枝や草の葉に、露が光りはじめた。林を通りぬけ、丘へ登り、畑を歩いた、溝を渉った。やがて空が白みはじめてきた。

祐八郎はふと、ぎょっとして足を停めた。すぐ眼の前に、木の香も新しい高札が立っているのをみつけたのだ。彼は近寄ってみた。

急度申遣事

一、石田治部、備前宰相、島津、三人、捕え来たるにおいては、御引物のためその所の物なり、永代無役に下さるべきむね御掟候こと。

一、右両三名とらえ候こと成らざるにおいては討果し申すべく候、当座の引物として金子百枚くださるべきむね、仰せ出でられ候こと。

一、その谷中差送り候に於ては、路次有りように申上ぐべく候、隠し候においては、その者のことは申すに及ばず、その一類、一在所、曲事に仰付けらるべく候こと。

右のとおりに候間おいおい御注進申上ぐべく候也

九月十七日　　田中兵部大輔

「もうこんな処まで！」

祐八郎は茫然とした。こんな処までもう手配が廻っているとすれば、主君の身の上はどうなったことか分らぬ、佐和山へも行けるかどうか。

「いやここで挫けてはいかん」
彼は自分を叱咤した。
「ひと眼でも御主君に会わぬかぎり死んではならん、どんなことをしても佐和山城へ入るのだ、どんなことをしても」
卒然として起こった馬蹄の音に、はっと我に返った祐八郎の背後へ、
「落武者だ、みんな出あえ！」
と喚きながら三騎の武者が馬を煽って殺到して来た。祐八郎は本能的に太刀を抜いた。抜きながら、右手の、深い叢林の丘へ、脱兎のように跳びあがって行った。

二の一

ひと息、丘を登ったところで、
「わっ」
というような叫びとともに、追い詰めて来た者が、うしろから槍を突きだした。穂先が外れた刹那、うしろ手に切り払った祐八郎の太刀が、偶然にも相手の両眼をみごとに薙いだ。……そのとき祐八郎は、ぎゃっと悲鳴をあげて転げ落ちる相手のうしろに、斜面を登って来る三人の武者たちの、大きく瞠いた眼と、なにか喚いているらしい口とが、なぜかしらひどくはっきり眼にうつった。
叢林に包まれた丘は、何段にもなって、次々と高くひろがっていた。……祐八郎は茂みを茂み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com